



ペースを保って走ることを指導する鈴木さん。「走る技術だけではなく、先を考える力も養ってもらえたら」と話す

こと13、2、1、GO！」  
鈴木さんの掛け声で、トラックを1周、2周と走る部員たち。鈴木さんはストップウォッチを片手に、「自分のペースをキープして！」とアドバイスを送る。

もともとは生徒10人で始まった陸上部。創立メンバーが部の存在を広めてくれたおかげで、この学校の生徒だけでなく、先生や社会人、靴磨きの少年といった地域の人々も入部。現在、約20人の部員たちが週3回の練習に参加している。

陸上部を立ち上げた理由について、鈴木さんは「体育の授業だけでは教えきれないことがたくさんあった」と話す。エチオピアの高校では体育が週1回で、しかも教室での座学が多い。さらに、この学校では1クラスの生徒数が60人という多さだ。「授業時間は40分しかないのに授業と授業の間に休み時間がなく、数少ない実技の授

業の前は着替えに時間がとられ、結局、残りは20分。体育を通して僕が伝えたいことを一人一人に分かってもらうには時間が足りない」と鈴木さんは話す。そこで、クラス対抗の球技大会を企画したり、視覚的に分かりやすい教材を作成するなど工夫に加え、授業外もスポーツを教えられる機会を作ろうと一念発起し、陸上部が誕生したのだ。

「順位にこだわる部員が多いのですが、大切なのは自分のタイム。目標を立て、それに向かってどう努力すべきか考えることを学んでほしい」と鈴木さん。創設時から参加している部員、アブラハム・ゲタハーンさん（18歳）は、「陸上部では、時間を守る。練習を休むときは連絡する。あいさつをする」という社会生活のルールを徹底して教え込まれます。鈴木先生の指導は厳しいですが、それは僕たちのことを考えてくれ



陸上部創設時からのメンバー、高校生のアブラハムさん。陸上部に友人を誘い、輪を広げてくれた

努力の大切さに気付く

日本からおよそ1万キロ。5月下旬、日本を出て20時間後によくやく東アフリカのエチオピアに降り立った。首都アディスアベバは標高2400メートルの高地にあるため比較的涼しく、この日の最高気温は25度。それでも「1年で一番暑いときに来たね」と現地の人に声をかけられた。日中は暑いですが、朝夕はぐんと気温が下がって肌寒い。

一般的に標高が高い場所では酸素が薄いため、より多くの酸素を体内に取り入らなくては心肺機能が自然に高まる。多くのスポーツ選手が高地トレーニングを行う理由だ。だからこそエチオピアはマラソンや5000メートル競走など肺活量が求められる長距離陸上競技に強い。東京オリンピック男子マラソン金メダリストのアベベ・ビキラや、世界陸上4連覇など圧倒的な強さから「皇帝」と称されたハイレ・ゲブレシラシエなど、これまで多くの有名選手がこの国から輩出されており、国際大会でのメダル獲得数も多い。

しかし実際、練習する場所や指導者が不足しているため、一般市民や学生にとっては、関心はあっても参加することはほとんどないという。しかし、陸上競技を通して学べることは多い。そこで、自

エチオピア  
from ETHIOPIA

# 子どもたちを変える力

チームワーク、社会性、規律、思いやり—。  
スポーツを通じて、子どもたちが学ぶべきことはたくさんある。  
それを伝えようと、学校と地域を巻き込みながら  
奮闘するエチオピアの青年海外協力隊員取材した。



ほこで、足をとられそうになった。トラックのラインも引かれていないため、鈴木さんが手押しメジャーで距離を測り、三角コーンを置いていく。部員たちも彼の指示でときはきと準備運動を終え、いよいよランニング開始だ。「二人一人がタイムを気にする



協力隊員の鈴木さんの指導の下、練習に励むハイヤー23高校陸上部の部員たち





高校生コーチのタンサイさんにアドバイスを石部さん。こつこつと努力を続けるタンサイさんへの信頼は厚い

唯一残ったチームのコーチを務めてきた高校生、タンサイ・マラクさんが指導する練習を見学に行くと、メンバーの小学生があいさつにきてくれた。「サラム（こんにはは）！」。石部さんの10のルールが根付いている証しだ。タンサイさんの指示で準備運動、シユートなどの基礎練習を行ってから、試合形式の練習へ。終了後には今日の練習を踏まえ

決めた10のルール。時間を守る、あいさつをする、相手を尊敬する、サッカー以外の勉強もきちんとやる。どれも一見サッカーとは関係ないように思えるが、実は上達のカギを握っている。

活動2年目には、地域の小学生にもこれらを学んでほしいと、「セルジュニアプロジェクト」を開始した。「僕の任期が終わった後も、サッカーの技術はもちろん、このグラウンドで得た規律や協調性が細胞（セル）分裂のように広まって受け継がれていってほしい。そんな願いを込めています」。小学生を

指導するのは石部さんではなく、クラブに所属する高校生。このプロジェクトは、石部さんが教えたことを高校生が受け継ぎ、それを次の世代に伝えていくという仕組みなのだ。

プロジェクト開始時には150人の小学生と20人の高校生コーチが集まり、8チームが結成された。だが1カ月後、残ったのはたった1チーム。10のルールを守れなかったり、サッカー試合だと思っていた子どもたちが次々に辞めていったからだ。「僕は練習あつてこそ試合だと思っています。試合で見つけた課題を練習して次に生かす。この継続こそ、うまくなるためには必要なのです」と石部さん。

こうして指導できるのも、高校のサッカークラブで石部さんの厳しい練習を経験したからこそ。途中で辞めてしまう生徒も多かった中、タンサイさんは、サッカーがうまくならないという強い気持ちで参加し続けてきた。「練習を重ねるうち、本當にうまくなった。自分で練習メニューを考えて子どもたちに教えることで、どんどん成長しています」と石部さんはうれしそうに話す。タンサイさんは、「サッカーの練習に行くから、この時間に勉強、この時間に家の手伝いと効率よく行動できるようにになりました」と話す。

「子どもたちにずっとサッカーを教えたい？」

石部さんがそう問いかけると、タンサイさんは「もちろん、僕がドルベテに在る限り」と明るく答えてくれた。すでにチームの中から3人の小学生コーチが生まれ、さらに年下の子どもたちに教え始めた。また、石部さんの指導を受けた高校生3人もタンサイさんに刺激を受け、再びコーチとして戻ってきた。石部さんの教えを受け継ぐ、頼もしい指導者たちが着実に育っているのだ。

エチオピアの子どもたちがスポーツを通して学ぶこと。それは彼らの将来にも変化を生み出す明るい光になるはずだ。



体育の授業でバスケットボールのパスを実演する森本さん。「最初は真っすぐに並べなかった生徒が次第に並べるように。小さな変化でもうれしい」



稲見さんが生徒にバスケットボールのシュートフォームを教える。実技の授業を楽しんでくれる生徒も多い

「これまで現地の教員は、バスケットボールで言えばパスやシュートしか教えていませんでした」

首都から飛行機で北に1時間、エチオピア最大の湖、タナ湖のほとりにある町バハルダール。ここにあるタナハイク中学校では、稲見隆典さんが体育隊員として活動している。

**スポーツの楽しさを知り チームワークを学ぶ**

と課題を話す稲見さん。「生徒はボールを適当に投げて、ゴールに入れたいと思っている。でも正しいフォームを身に付けて、シュートが確実に入るようになったら、もっと楽しいと思えますよね」。そこで、稲見さんは同じ地域のギオン高校で活動する体育隊員の浅野翔太さんと協力し、学校対抗の球技大会を企画。また、用具がなくても効率的に授業を行える方法を、セミナーを通して現地の教員に伝えるなどの活動に取り組んでいる。

バハルダールから車を走らせること約30分。メラウイ村の高校では、体育隊員として森本大樹さんが活動している。森本さんは生徒たちにもっとスポーツに触れてもらおうと実技の授業を増やしたところ、ある課題にぶつかった。バスケットボールの試合をしても、みんな自分のことしか考えないのだ。全員がボールに殺到し、一度手にするとパスも出そうとしないため、試合が成り立たない。「エチオピアの多くの人々は、道徳教育を受ける機会が少ない。家庭内でもほとんど協調性などが教えられていない環境では、生徒が相手の気持ちを考え

たり周りの空気を読むのが苦手なのは仕方ないのかもしれない」と森本さんは話す。

そこで彼が生徒たちに教えているのが、仲間と共有する大切さだ。「授業の内容もテストの日程も、何でもみんなで教え合い、共有するように。最初はクラスメートでもお互い名前を覚えないうらいでしたが、次第に団結力が高まり、今では全員が「仲間」になったクラスもあります。知って、理解して、行動できれば人は変わっていく。「未来を担う子どもたちが助け合いや思いやりの心を身に付けたい、エチオピアは大きく変わるはず。協調性やチームワークを学べる体育はその一端を担うことができると思います」。森本さんはそう期待している。

**サッカーを通して受け継がれていくルール**

メラウイ村からさらに車で30分、未舗装の道からドルベテ村に入ると、土壁の家々が並び、はだしの子どもたちが遊んでいる。

この村の中心部にあるドルベテ中高校では、体育隊員の石部元太さんが活動中だ。「サッカーを通して教えられることがある」と、活動1年目には学校でサッカークラブ「We are the World FC」を立ち上げた。部員になったら必ず守らなければならないのが、石部さんが



子どもたちは大好きなサッカーを通じて次第にルールを守ることが習慣になっていた



石部さんが活動するドルベテ村。クラブで使える運動場以外、サッカーができる広い場所は少ない